



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3076 号 2016.6.13 発行

菓子作り通し生活向上へ 新たな福祉プロジェクト取材しました。

FNNニュース 2016年6月12日

最高のお菓子作りを通して、障害者の生活を向上させようという、ある企業の取り組みが、注目を集めています。

日本初という、新たな福祉プロジェクト取材しました。

千葉市のデパートで開催されている、お菓子の販売イベント。

絵本作家(画家)・たなかしんさんは「有名な横溝春雄シェフが、レシピを考えて、僕が、このパッケージを描くっていう」と話した。

一流のパティシエが、レシピを監修し、人気の絵本作家が、パッケージをデザインするなど、徹底的にこだわった焼き菓子がずらり。

客は、「すごく、おいしかったですよ」、「すごく、いいと思います。パッケージで決める人も、たくさんいると思う」などと話した。

客が絶賛する、お菓子の売り場には、「テミルプロジェクト」の名があった。

そこで、これらのお菓子の1つを作っている工場取材してみた。

すだち作業所・泉田晴香生活指導員は「障害者の方の職業訓練所」と話した。

ここは、もともと知的障害者の福祉作業所として、パンや焼き菓子を作り、作業所の前や市役所などで販売していたが、5年前から、障害者と、お菓子作りのプロが手を組む、テミルプロジェクトに参加した。

泉田さんは「百貨店にも出せる商品を、福祉施設で作るということで、売り上げが上がって、それが皆さんの工賃に反映される」と話した。

実は、福祉作業所などで働く障害者の平均工賃は、1カ月およそ1万4,800円。

この待遇を改善していこうと、7年前に、このプロジェクトを立ち上げた企業が、テミルだった。

現在、プロジェクトに参加する福祉施設は、全国に20カ所ある。

株式会社テミル・船谷博生代表取締役は「一切妥協はしない。というのは、妥協してしまったら、中途半端な(お菓子の)味が、障害者の価値、そのものになってしまうので、偏見の払拭(ふっしょく)をしようと、日々活動しています」と話した。

さらに、こんな取り組みもある。

バームクーヘンで知られる、洋菓子の名店「クラブハリエ」がプロデュースするカフェを、3年前にオープンした。

店員・鉢呂飛鳥さん(26)は「失礼いたします。フルーツソテー(パンケーキ)になります」と話した。

生まれながらの知的障害を持つ、鉢呂飛鳥さんは、3年前から、このカフェで働いている。鉢呂さんは「お客さんもいっぱい来るし、(メニューの)提供もできて、楽しい雰囲気を感じます」と話した。

ここでは、お菓子作りだけでなく、接客なども行い、障害者がより活躍できる店を目指している。

テミカフェ責任者・松林恵之さんは「こちらは、じかにお客さんと相對してもらい、お金の大事さをわかってもらう」と話した。

当初、1人で接客をさせるのは心配だったと語る、鉢呂さんの父親。

鉢呂俊一さん(49)は「毎日、生き生きというより、とにかく仕事が面白いという形で、家に戻ってくるんですよ。きょうは、お客さんが何人来たよなんて、職場での話をよくしてくれるようになりました」と話した。

障害者を守る施設から、お菓子作りを通して、共に働き、共に考え、自立を目指す、テミルプロジェクト。

この先に目指すものは。

株式会社テミル・船谷博生代表取締役は「1カ月1万円だった賃金が、うちと始めて3年目で、4万円を超えた施設もある。でも、4万円ではまだまだで、やっぱり6~7万円くらいにして、障害年金とあわせて、最低賃金以上にはなるようにしていきたい」と話した。

仕事に対して妥協しない、厳しい挑戦があるからこそ、働く側にも責任感が生まれ、生きがいにつながっているという。

近々、さらに5つの施設が加わり、たくさんの人にお菓子を届けるため、百貨店の催事販売・ネット販売を、今後も行っていくという。

社会保障これが実現 通常国会の成果から

公明新聞 2016年6月12日

福祉といえば公明党。先の通常国会で公明党が推進し、実現した社会保障分野の主な実績を紹介します。

介護の充実 50万人分の受け皿確保へ。法改正で休業の取得促進

家族の介護を理由に職場を離れる「介護離職者」が年間約10万人に上る現状を踏まえ、公明党は「介護離職ゼロ」の実現へ介護の受け皿拡大を推進しました。施設・在宅サービスの整備を加速し、2020年代初頭までに50万人分以上の新たな受け皿を確保します。

介護と仕事の両立支援では、介護を要する状態となった家族1人に対し、最長93日の介護休業を一括でしか取れなかった仕組みを改め、最大3回まで分割して取れるよう法律を改正。介護対象家族1人につき年5日の介護休暇も、半日単位で取れるようにしました。いずれも来年1月から施行されます。

今年8月には、介護休業期間に支給される介護休業給付が、賃金の40%から67%に引き上げられます。

認知症対策 早期診断・対応のチーム拡大。「若年性」に支援も

2025年には65歳以上の約2割が認知症になると予測されており、早期診断・早期対応の取り組みが今後さらに重要となります。

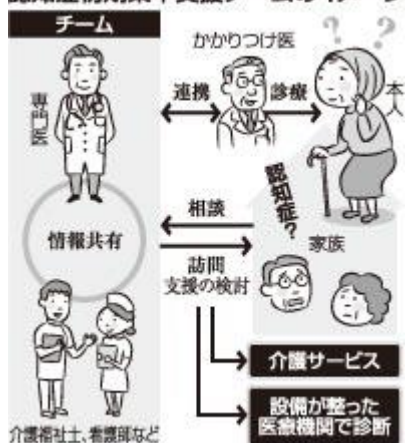
このため今年度は、認知症に気付いた本人や家族などから相談を受け、医師や看護師らが自宅を訪ねてサービスを提供する「初期集中支援チーム」の実施箇所を316(15年度)から911へと拡大。地域における治療拠点「認知症疾患医療センター」は、366カ所(同)から433カ所まで増やします。

65歳未満で発症する若年性認知症については、医療・福祉・就労などの相談に対応し、関係機関の調整役を担う「若年性認知症支援コーディネーター」を各都道府県に配置するなどの取り組みを進めます。

ドクターヘリ 今年度、全国51機体制に。操縦士養成・確保も充実

公明党が推進してきた「ドクターヘリ」の予算が拡充し、今年度に新たに5機配備されます。配備が完了すれば、40道府県で運航され、51機体制となります(このほか、東京都は

認知症初期集中支援チームのイメージ



65歳未満で発症する若年性認知症については、医療・福祉・就労などの相談に対応し、関係機関の調整役を担う「若年性認知症支援コーディネーター」を各都道府県に配置するなどの取り組みを進めます。

ドクターヘリ 今年度、全国51機体制に。操縦士養成・確保も充実

公明党が推進してきた「ドクターヘリ」の予算が拡充し、今年度に新たに5機配備されます。配備が完了すれば、40道府県で運航され、51機体制となります(このほか、東京都は

独自運航)。

ドクターヘリの出動件数は年々増加。2014年度は年間2万2643回に上り、1県当たり年平均で629回になります。東日本大震災や熊本地震など災害時でも活躍しています。

一方、出動回数が増えると、費用もかさみます。このため、公明党は運航費補助金の増額を要望。今年度から補助額が1拠点当たり3000万円増額しました。さらに、操縦士不足を解消するため、操縦士の養成・確保対策として、新たな訓練プログラムの策定なども行われます。

がん対策 検診を強化。緩和ケアが充実、就職支援も全国展開

がん検診の受診率をアップさせるため、郵送や電話などで個別に受診を勧める「コール・リコール」(個別受診勧奨・再勧奨)を強化し、これまでの乳がん、子宮頸がん、大腸がんに加え、新たに胃がん、肺がんを対象に追加しました。

対象年齢は子宮頸がんが20、25、30、35、40歳。その他が40、45、50、55、60歳です。対象年齢の人に対し、市区町村が受診の意向や受診希望日などのアンケートを実施。その結果を基に受診日の設定などが行われます。

このほか女性特有の乳がんと子宮頸がんについて、検診無料クーポンの配布も実施。さらに、地域の生活を支援する緩和ケアの体制整備や、全国のハローワークと拠点病院などが連携した就職支援が行われます。

日本版ネウボラ(子育て世代包括支援センター)

全国251市区町村まで拡大し、妊娠期から切れ目なく支援

高校生等奨学給付金 給付額が約6~7割増。低所得家庭の教育関係費負担を軽減

児童扶養手当 ひとり親家庭の“命綱”が大幅拡充。第2、第3子加算額が倍増

不妊治療費助成 初回の助成額が倍増の30万円に。男性治療は最大15万円上乗せ

保育の受け皿 待機児童解消へ2017年度までに50万人分増やす目標を達成します

無利子奨学金 大学生など対象の無利子枠が1.4万人分増えて47.4万人分に

生きづらいのは進化論のせいですか？

『理不尽な進化 遺伝子と運のあいだ』著者、吉川浩満氏インタビュー

シノドスジャーナル 2016年6月13日

進化論って、適者生存のこと？ 進化論のせいで生きづらくなっていないですか？ 絶滅から生命の歴史を考える『理不尽な進化 遺伝子と運のあいだ』著者である吉川浩満さんに、私たちの「進化論」と科学的な「進化論」との違いについてお話を伺った(聞き手・構成／山本菜々子)

進化論のせいで生きづらい？

——進化論は、ずっと温めていた企画なので、実現できてとても嬉しいです。今日は『理不尽な進化』著者の吉川さんに色々とお話を伺いたいと思います。

よろしくお願いします。パフェ頼んでもいいですか。

——どうぞ、どうぞ。

ありがとうございます。いただきます。

山本さん(註：インタビュアー)がくださった企画要旨のメールに、「生きづらいのは進化論のせいだ！」とあったのが印象的でした。半分ご冗談なのかもしれませんが、おっしゃることはよくわかります。そのあたりから始めましょうか。

——「弱肉強食」「適者生存」みたいな言葉を聞くと、日々がむしゃらに頑張らないといけないような気がしてきて、つらくなります。

そうですね。社会に流通している進化論風の考え方に触れて、生きづらさを感じる人がいるのはよくわかります。

特にビジネス書や処世術の本なんかには、そうした弱肉強食的な価値観がよく見られます。社会は生き残りをかけたサバイバルゲームだ、ライバルとの競争に負けたら滅びるしか

い、そのためには進化していかなければならない、というような。人の劣等感や優越感を刺激して競争へと駆り立てようとする論法ですね。これに違和感を覚えるのは山本さんだけではないと思います。私もそうです。

反対に元気になる人もいます。先日、進化論について本を書いたと知人に言ったら、「やっぱ進化論いいすよね」と返ってきました。話を聞くと、今の世の中は弱者や無能が優遇されすぎている、本当に優れた者が生きづらい社会だ、弱者や負け犬の救済は一切不要、生活保護も打ち切るべき等々と熱っぽく語る。彼は、こうした弱肉強食の真理を教えてくれるのが進化論だと思っていて、だから「進化論いいすよね」となるのですね。軽いめまいを覚えました。

そんなこんなで、詳しく学んだことはなくとも、また賛否にかかわらず、私たちは進化論をなんとなくわかったような気になっている。弱肉強食の世界の中で、適応して生き残る者と適応できずに死んでいく者がいる、といった認識ですね。勝ち組／負け組とかモテ／非モテのような言葉もそうした文脈で語られています。

ところで、そもそもこれは本当に進化論なのか。実際のところ、日常生活で流通している進化論と、専門家が研究している進化論とは、かなり違います。専門家の世界では進化論は有用な科学理論として存在していますが、その一方で、私たち素人はその内容をよく理解しないまま、いいように語っているのです。

ダーウィニズムはダーウィニズムじゃない？

——では、この社会にある「進化論」はいったいどこからやってきたのでしょうか。全部、私たちの科学的知識の無さや誤解から生まれたものなのですか？

社会に流通している通俗的な進化論が、科学理論としての進化論を誤解していることはたしかですが、まったくのデタラメというわけでもありません。ちゃんとした出自にはあります。

それは、科学史家のあいだで「発展的進化論」と呼ばれる、ダーウィン以前の進化論です。有名なのはフランスの博物学者ラマルク。キリンの首が長いのは、先祖のキリンが高所の葉っぱを食べるために努力をつづけたからだ、という話を聞いたことがあるでしょう。ラマルクは、生物の進化には目標があると主張しました。また、生物には目標の達成度に応じて優劣の序列がある。ラマルクにとって進化とは前進であり発展なのです。

その後、イギリスの思想家ハーバート・スペンサーがラマルクの進化論を発展・拡張させて、世界中で大ブームになりました。彼は、宇宙のあらゆる物事が進化すると考えました。彼に言わせれば、人間の社会も古代国家や未開社会から近代的な国家へと進化していく。その過程において、「適者生存」——この言葉を考案したのもスペンサーです——の競争が行われるのです。

このようにしてスペンサーは、ラマルクの発展的進化論と当時の資本主義先進国を席卷していた自由競争主義を接続し、上昇志向の近代人にぴったりの「進化論」を仕立てあげました。

——ということは、私たちが考える「進化論」はスペンサーのものであると。

そうです。ラマルクの発展的進化論を人間社会に適用したスペンサーの思想です。歴史の教科書などで「社会ダーウィニズム」と呼ばれますが、だから本当のところはこの思想はダーウィニズムではありません。正しくは社会ラマルク主義、あるいはスペンサー主義と呼ばれるべきものです。学問の世界ではすでに否定されています。

いま学問の世界で認められているのはダーウィン由来の進化論です。これは生物の進化にいつい目的や目標を認めません。生物の進化を左右するのは目的や目標ではなく、偶然です。進化は単なる結果でしかなく、それ自体ではよいものでもわるいものでもありません。だから生物間に優劣の序列もありません。進化の目的や生物の序列といった発展的な考えと手を切った進化論です。

つまり、私たちの社会にはふたつの進化論が共存しているということになります。学問としての進化論と、一般人の世界像としての進化論。前者はダーウィンが発祥ですが、後者

はスペンサーによってつくられたものなのです。

現在、「ダーウィニズム」という言葉が「進化論」の同義語のように使われているために、たとえば「進化論のせいで生きづらい」と思うとき、元凶はダーウィンにあるように感じるかもしれません。でもそれは濡れ衣です。

——社会にも進化論を当てはめることに問題があるのでしょうか。

そこは微妙なところで、これには「問題がある」というより「問題があった」とお答えするのがよいかもしれません。20世紀半ばまで世界を席卷した元祖「社会ダーウィニズム」は、科学的に間違っているだけでなく、植民地主義や人種差別を正当化するひどい代物でした。その意味では明らかに問題があった。

でも、本来ダーウィニズムは、進化の目的や生物の序列を認めないわけですから、そのような含意をもつことはありません。実際、現在では生物学だけでなく、人間の社会や心理を扱う学問——心理学や経済学、社会学など——にもどんどん採り入れられています。

アメリカの哲学者ダニエル・デネットは、ダーウィニズムを「万能酸」と呼びました。万能酸とは、どんなものでも侵食してしまう空想上の液体のことです。つまり、ダーウィニズムは本来、生物だけでなく社会にも人間にも、また製品やサービスといったものにも適用できる万物理論です。そして、科学理論だけでなく思想や宗教といった人間のあらゆる精神的活動に影響を与えずにはいません。私もデネットに賛成です。ただ、その適用の仕方には注意しなければならないということです。

進化論という「お守り」

——私たち一般人が漠然とイメージしている進化論と専門家が研究している科学的な進化論とは別物だということはわかりました。でも、どうして別物になってしまうのでしょうか。

その理由は、根本仮説である自然淘汰説の独特の性質にあると思います。

「適者生存」という言葉がありますね。これは自然淘汰説を言い換える言葉としてスペンサーによって考案され、ダーウィン本人にも採用されたスローガンです。この言葉は社会ダーウィニズムによって濫用されたせいで現在ではあまり好んで用いられないのですが、それ自体としては自然淘汰説の中心アイデアを明快に伝える優れたキャッチフレーズです。その中心アイデアとは、「適者」は「生存（繁殖）」によってのみ定義される、というものです。適者とは単に生き延びて子孫を残した者を指すのであって、私たちが「弱肉強食」や「優勝劣敗」のイメージで想定するような強さや能力とは関係がない。ただ、生きのびて子孫を残すことができる者を「適者」とみなしているだけなのです。

ところが私たちは、「生存する者を適者とする」をひっくり返して、「適者は生存する」という自然法則のようなものとして適者生存のアイデアを用いています。

——法則じゃない？

はい。適者生存の原理は、「適者は生存する」という法則ではありません。「生存する者を適者と呼ぶ」という約束事であり、そこから仮説をつくりだすための前提です。

たとえばケプラーの法則は、実験や観察によって真偽を検証することができます。でも、適者生存の原理は、真偽を検証できるようなものではありません。「結婚していない人を独身者と呼ぶ」と同じように、適者の意味を定義しているにすぎないのです。これを前提として、科学的に生物の有様を説明する仮説を立てるわけです。

私の好きな言葉に、「進化論は計算しないとわからない」というものがあります（星野力さんによるもので、同名の本も出版されています）。学問的な進化論は、この基準を前提として仮説を立て、計算したり調査をしたりしてようやく成立するものです。

つまり私たちは前提と結論を取り違えているのです。

——どうして取り違えるのでしょうか。

おそらくはそれが都合のいい「言葉のお守り」になるからです。私たちは、半分は無意識に、半分は意図的にそうしているんじゃないかと思います。

哲学者の鶴見俊輔は終戦直後の1946年、「言葉のお守りの使用法について」という論文を

発表しました。

彼は、私たちが使う言葉には「主張的な言葉」と「表現的な言葉」があると言います。主張的な言葉とは、 $1+1=2$ のように、真偽を確かめることができるものです。表現的な言葉とは、「結婚してください」のように、真偽の関係なく、呼びかける相手になんらかの影響を及ぼすような言葉です。

鶴見が問題にしているのは、実質的には表現的なものだけれど、形だけは主張的な言葉に見える場合です。たとえば戦争中に唱えられた「米英は鬼畜だ」という言葉。たんに米英を憎み嫌う表現的な言葉ですが、あたかも主張的な言葉のように使われました。これを彼は「ニセ主張的命題」と呼びました。

このニセ主張的な命題は、お守りのように、なんらの検証なしにありがたがられる言葉になりがちだと鶴見は言います。「米英は鬼畜だ」はその典型で、社会で認められている価値観に乗っかることで、なんとなく安心するのですね。自分の言葉に箔がつく。これが言葉のお守りです。

「適者が生存する」という擬似法則は、このお守りの使用法にぴったりなのです。ぱっと見、それは自然法則のようなものに見えます。でも、先に確認したとおり、適者生存の原理は「生存」によって「適者」を定義するものですから、結局のところそれは「生存する者は生存する」という同語反復になるしかありません。検証をまつまでもなく、つねに正しい命題です。

いっけん自然法則に見えながら、その実つねに正しい同語反復的な命題。何も言っていないに等しいけれど、その代わり、あらゆる物事に当てはめることができる言葉。これ以上にお守りの使用法に適したものはありません。

各種メディアや広告、はたまた匿名掲示板などで私たちが出会う進化論は、まさにそのように機能しています。「優れた者が勝ち残る」とか「劣ったものは淘汰される」とか「滅びる運命だった」とか、いろいろなヴァリエーションがあると思いますが、煎じ詰めれば「適者は生存する（生存する者は生存する）」という同語反復を、さも自然法則の結果であるかのように言い立てているだけなのです。

実際には「ざまあみろ」とか「残念だ」とか「そうになりたい」といった表現的な言葉であらわされるべき感情を、まるで主張的な科学理論であるかのようなパッケージにくるんで送り出すことができる。こんな便利なものはなかなか手放しづらいと思います。

『理不尽な進化』を生物種の絶滅の話から始めたのは、こうした都合のいい進化論の理解と使用法に対して、ちょっと揺さぶりをかけてみたいと思ったからでした。

絶滅のシナリオ3パターン

——『理不尽な進化』を読むと、多くの生物は絶滅しているんですね。

はい、これまでに登場した生物種の99.9パーセントは絶滅したといわれています。存続しているのは0.1パーセントにすぎない。つまり生物種はほぼ絶滅する。

これは少し不思議なことでもあります。生物個体なら、寿命というかたちであらかじめ死がプログラミングされている。でも生物種の絶滅があらかじめプログラミングされているとは考えにくい。では、どうして絶滅するのか、寿命とは違う理由を探さなければならぬ。

普通に考えれば、生存競争に敗れたから、つまりは生物として劣っていたから絶滅したんだということになる。これが現代のスペンサー流進化論の常識です。

でも、「別にそんなことなくね？」と問題提起をした学者がいました。古生物学者のデヴィッド・ラウプです。彼は膨大な化石標本と統計学を駆使して、どうして生物種が絶滅へといたるのかを探った。

彼の結論は、生物種は多くの場合、運がわるくて絶滅するのだというものです。

ただ、もちろん、すべてが運次第というわけでもない。もう少し詳しく見てみると、生物種が絶滅へといたる過程には、次のような三つのシナリオがあると言います。

1. 弾幕の戦場

2. 公正なゲーム

3. 理不尽な絶滅

弾幕の戦場は、完全に不運による絶滅を指します。隕石の衝突とか火山の噴火の現場に居合わせてしまった生物種は、生物としての能力や特徴にかかわらず絶滅してしまいます。「運がわるくて絶滅する」と聞いたときに思い浮かべるのはこうしたシナリオかもしれませんが、すぐ後に述べるように、これがすべてではありません。

もちろん、ふだん私たちが思い描く進化論のイメージに近い絶滅もあります。それが公正なゲームのシナリオです。市場における企業同士の競争のように、生存競争の結果として絶滅が起こる。こうしたかたちで起こる絶滅も当然あります。

前者の絶滅は「運」によって、後者の絶滅は「能力」によって引き起こされたということになります。

——運の場合も、能力の場合もあると。ちなみに、この二つでシナリオは説明しつくされているような気もするのですが。もう一つの「理不尽な絶滅」とはなんでしょう。

ラウプによれば、生物の歴史において、運の要素は弾幕の戦場のようなロシアンルーレットよりも複雑な働きをします。それが理不尽な絶滅で、これはいわば「運」と「能力」が組み合わされたシナリオです。

有名な恐竜の絶滅は、理不尽な絶滅シナリオの典型です。

隕石衝突の直後、まずは落下地点の近くにいた生物が弾幕の戦場シナリオによって死に絶えました。その後、衝突により大量の塵が巻き上がり、地球に降り注ぐ太陽光を遮ります。これは、数カ月から数年にわたって続いたようです。

その結果、光合成生物が絶滅し、それを食べていた草食恐竜も絶滅、草食恐竜を食べていた肉食恐竜も絶滅しました。この危機を生き延びたのは、光合成を必要としない菌類や、寒冷な気候に強い小動物たちでした。恐竜たちは、隕石衝突後の世界の中ではもっとも不利だったわけです。

つまり、まず隕石の衝突という運が支配する弾幕の戦場があり、衝突後の世界の新しいルールの中で能力をもとにした公正なゲームが設定されたのだと言えます。「能力」を競うゲームのルール自体が「運」によってもたらされた。これによって起こるのが理不尽な絶滅です。

結局のところ恐竜は能力が無かったんでしょ？ と思うかもしれませんが。でも、これはマイケル・ジョーダンに子供用の障害物競争をさせるようなものです。ジョーダンが素晴らしいバスケットボール選手であることは誰もが認めていると思いますが、彼に子供と同じトンネルや輪くぐりはできないでしょう。ジョーダンがいつまでたってもゴール出来ないのを、彼の能力不足だと言えるでしょうか。

——なるほど、「運」か「能力」か？ ではなく、両方、もしくは、「運」によって「能力」そのものの定義が変わるということですね。

そうです。ラウプが「生物種は運がわるくて絶滅する」と言うときに想定している「運」とは、このような理不尽な絶滅シナリオにおける微妙な運の働きです。

私たちは普通、生物の歴史を生き残りの観点から眺めます。すると生存バイアスが働いて、生き残った生物種は能力に優れていたから生き残ったのだと考えがちです。

でも、全生物種の99.9パーセントを占める絶滅の側から生物の歴史を見たとき、そこには能力的に優れた生物種から残念な生物種まで、ありとあらゆるヴァリエーションがあったことがわかる。

この事実を正面から受け止めたとき、どのような教訓が得られるか。それは、生き物たちの存亡を左右した決定的な要因は、能力そのものでも運そのものでもなく、運によって能力の定義自体が変わってしまうという歴史の「理不尽さ」にあるのだということです。

凡人の考えを撃つ？

——それが『理不尽な進化』という書名に込められたメッセージでしょうか。

そのとおりです。最後にもうひとつ、なんでこんな本を書いたのかについてお話ししたい

と思います。

ある自然科学の専門家が、本書を読んで「凡人の考えを撃って何がおもしろいのか」という趣旨のコメントをしているのを見かけたことがあります。

言いたいことはよくわかります。まず、専門家の進化論と素人の進化論のあいだに乖離があるという事実や、これまで現れた生物種のほとんどが絶滅しているという事実は、少しでも進化論をかじったことのある人にはわかりきったことです。それこそ凡人にすらわかるはずです。

もし進化論という学問を発展させたいならば、凡人にかかずらうことなく、非凡な研究者や研究成果と付き合い、新しい知見を生み出す努力をしなければなりません。もちろん私も一人の進化論ファンとして研究の進展を願っています。でも、それは私の仕事ではありません。専門家の仕事です。

では、何がしたかったのか。それは、進化論を語るときに凡人たる私たち一般人は実際のところ何をしていることになるのか、これを理解することでした。この社会に流通している進化論のイメージが、科学の世界で運用されている進化論と違うことは、ちょっと調べればすぐにわかります。でも、どうしてこのような乖離が生じるのか、それによって私たちにはどんな利得や損失があるのか、これを考えてくれる人はめったにいません。

どれだけ成功したかは心許ないにせよ、本書で私はこのことについて考え、とりあえずの仮説を提示しました。先に述べたように、私たちは進化論を言葉のお守りのように使用しているのではないかということ、そしてそれは自然淘汰説がもつ独特の性質によって導かれるものではないかということ、これがその仮説です。

結果として「凡人の考えを撃って」いるように見えることもあるかもしれませんが、私の関心は批判や教化を行うことではなく、あくまで理解することにあります。

ふだん私たちは何を考えているのか、何をしていることになるのか。これが関心であり、これはこれでひょっとしたら、私たち現代人のセルフ・ポートレートあるいは現代社会の習俗を伝える社会人類学的資料として、非凡な成果につながるかもしれない仕事だと思っています。



理不尽な進化：遺伝子と運のあいだ 著者／訳者：吉川 浩満

出版社：朝日出版社（2014-10-25）

定価：¥ 2,376 Amazon 価格：¥ 2,376 単行本
（ソフトカバー）（448 ページ） ISBN-10：
4255008035 ISBN-13：9784255008035

**脳がわかれば心がわかるか——脳科学リテラシー
養成講座 (homo Viator)**

著者／訳者：山本貴光 吉川浩満

出版社：太田出版（2016-06-07）

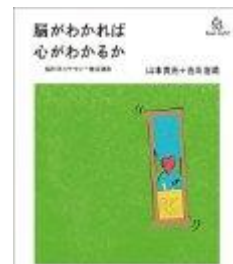
定価：¥ 2,592 Amazon 価格：¥ 2,592 単行本（320 ページ）

ISBN-10：4778315197 ISBN-13：9784778315191

吉川浩満（よしかわ・ひろみつ） 文筆家

文筆家。1972年生まれ。慶應義塾大学総合政策学部、国書刊行会、ヤフーを経て、現職。山本貴光とともに「哲学の劇場」を主宰。著書に『理不尽な進化』『心脳問題』『問題がモンダイなのだ』ほか。関心は哲学/科学/芸術、犬猫鳥、デジタルガジェット、単車、映画、ロックなど。卓球愛好家。

Twitter: @clnmn ブログ: <http://clnmn.hatenablog.com/>



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行